

# 韓国の幼児教育における伝統音楽の伝承

— 儒教思想による子育てを背景として —

朴 成 泰

Teaching Traditional Music in Korea Preschool Education

sungtai PARK

(Received September 26, 2003)

## はじめに

韓国の近代化は1970年代から本格的に展開され、政治、経済、産業、教育などが目覚ましい発展を成し遂げた。このような発展は、国民学校（小学校）のみに限られた義務教育を中学校まで延長すると共に、高等教育においても、1970年代に70校に過ぎなかった大学が2001年には355校（大学196校、短大159校）を数えていることに見られる。

韓国の近代化は国際社会から高く評価されているが、民族精神や伝統文化は薄れ始め、とりわけ欧米志向のライフスタイルは、子育てにそのまま影響を与えている。その結果、儒教思想による大家族制度は崩壊し、高齢者から伝授されてきた韓国の伝統的な育児方式を喪失している。

韓国社会の変革をもたらした一因は、伝統政治理念であり、宗教でもある儒教思想が著しく薄れてしまったことにある。その結果、少子化はいうまでもなく、伝統育児に伴う伝承音楽のわらべ歌、子守り歌、遊び歌などが歌われなくなっている。こうした実態からみると、伝承音楽の伝播は、これから日常生活をもとにする伝承という自然な方法より、むしろ意図的な保存という施策が求められる。

韓国の伝統音楽の伝承は、音楽そのものを伝えることより、韓国人の精神世界を支配してきた朱子学儒教を抜きにしては、単なる遊び歌の保存に過ぎない。すなわち、厳しい儒教思想は、子どもの日常生活と精神世界に大きな影響を与え、子どもの遊びにも精神的、儀式的、制度的に並ならぬ規範と儀礼を求めてきた。しかし、先行研究では、韓国の遊び歌を民族文化の継承という次元から、発掘および保存に重点が置かれ、羅列的、網羅的に紹介することに止まり、子育てにおける儒教思想と遊び歌の意義との関連は必ずしも解明されたとは言えない。<sup>1)</sup>

したがって、本稿では、世界史における一王朝（518年）として最も長かったと言われる朝鮮の政治理念であり、民族精神の源とも言える儒教思想をもとに、今日の韓国の幼児教育と伝統音楽の伝承を子どもの遊び歌から考究したい。

## 1. 韓国における儒教社会と伝統育児

儒教は古代中国より孔子が提唱した思想を信じる宗教であり、堯、舜、禹、湯、文、武、周公の道を集成した学問でもある。これは中国固有の思想をまとめ、孝悌忠信を中心に日常生活の実践道徳を完成するものであり、最高理念は「修身齊家治國平天下」である。教理は詩伝、

書伝、周易、礼記、春秋の五経および論語、孟子、中庸、大学の四書は儒教の重要な経典と云える。後に孟子は仁義の道を訴えて性善説を唱えるが、荀子は孟子の性善説に反する性悪説を示し、礼儀と勉学を勧めた。

韓国における儒教はいつ伝来されたかは不明であるが、唐へ留学生を派遣し、後に儒教研究所である国子学を設立したことを鑑みれば、三国時代（4～7世紀）に既に儒教が一般化されたとみられる。要するに、高句麗は372年に太学という教育機関を建てて教育を行っており、百済は285年に特使の王仁が早々に日本に『千字文』『論語』を伝えている。また、新羅は少し遅れたが、682年に儒教研究機関の国学を設立している。

当時、儒教は宗教にとどまらず、学問としても位置づけられたが、目標は第一に、経典や史記に通じて政治や法律の制度を理解し、それを運営できる官吏を養成するものである。第二に、詞賦と文章を熟練させるものである。したがって、当時の儒教は内面的ではなく、外面的であるとともに、目的のためのものではなく、手段のためのものである。三国時代の代表的儒家は新羅の薛聡、崔致遠であり、高麗時代は安珣などによる性理学が伝来され、鄭夢周、鄭道伝などの儒学者が現れた。朝鮮時代に入り儒教崇拝政策が国是として定められ、儒学は治国原理となり、儒学の全盛時代を迎えていた。とりわけ李滉と李珥は最も優れた儒学者であり、韓国の儒学史上を代表する儒者として尊ばれている。

ところが、儒者らは学派を形成し、後に東人と西人の朋党として対立するとともに、党争の原因となったが、韓国の思想界に占める位置は極めて重要である。しかし、時代の変遷による鎖国政治から門戸開放の勢いをみせると、全土の儒生は外国勢力の排斥を積極的に主張したが、守旧運動は成功せず、韓国の開化功績より、むしろ障害物となってしまった。その原因は旧韓末期（大韓帝国）の儒教が維新精神を忘却したまま保守と頑固のみを繰り返し、いち早く明治維新に成功した日本に韓国併合をもたらしただからである。

韓国伝統社会の特徴を取り上げると、政治体制はアジア封建制度をとり、経済体制は農業経済社会であり、社会、倫理体制は明確な身分体系を整えるだけでなく、儒教倫理が支配する社会である。これは韓国、日本、中国などを含めた東アジアの伝統社会が家族の結合体である同族をもとにしながら、政治構造と機能において絶対王権という共通点を有する点である。<sup>2)</sup> アジアの封建制度は家父長を頂点とした家族構造と家族秩序および家父長権継承などの家族制度が拡大された政治体制である。家父長権が男性に継承されたように、国家も大きな同族として組織された巨大な家族である。国家としての安定は、正にこのような血縁をもとに同族をコントロールすることで維持され、国家と民衆の要求に対立は存在しなかった。韓国伝統社会は王権と家父長権が血縁に則して自然に世襲されて制度的に安定していた。<sup>3)</sup>

産業経済における韓国の伝統社会は農業を経済の中核として位置づけていた。儒教的な農本思想は農業が本業であり、商工業を副業とした「務本末策」が朝鮮時代の政策である。<sup>4)</sup> 朝鮮を建国しても、高麗末期の科田法が朝鮮土地制度の基本となり、王族には広大な直属土地が与えられた。官吏にも身分によって科田、功臣田、別賜田が付与され、子孫に世襲が認められた。農民はそれらの土地を耕作して収穫分の1割を土地所有者に納品し、所有者は徴収品の所定比率を税収として上納していた。しかし、商工業はできる限り抑制し、「農者天下之大本也」として農業を最重視していた。<sup>5)</sup> 農業社会の発達には家族労働力を増やすため、多産と男児出産を歓迎したが、とりわけ女子労働力を貰える男児出産の価値は労働力を奪われる女児出産より歓迎されたと言われる。<sup>6)</sup>

朝鮮の政治哲学は儒教的な王道政治である。したがって、身分制も治者階層と被治者階層が

区別される。この二つの階層は、更に血縁や職業によって区別される。故に両班、中人、常民、賤民を設けて厳しい階級社会を貫いた。<sup>7)</sup> 両班階級（士大夫）は高麗時代に文科に属した階級として朝鮮時代には官職を占める支配的な社会集団であった。

両班階級の下は、特殊技術をもつ実務職を世襲する中人があり、中人は外国語、医学、天文、地理、法律、会計などに携わる者であるが、ソウルの中心地に在住したために中人と呼ばれた。また、常民は主に生産と賦税を担当する農民、商人、手工業に従事する階級である。最も低い身分は賤民であるが、彼らは奴婢として官庁や個人に隷属され、人権が無視された階層である。このような厳しい身分制は生得的であり、身分昇格は認められず、永久固定を鉄則としていた。<sup>8)</sup>

前述のように、朝鮮は建国理念を儒教で定め、社会規範は朱子学儒教を奨励したため、三綱五倫の倫理綱領が韓国伝統社会の価値基準となった。儒教社会の特徴としては、第一に、家父長制の継承である。伝統社会の規範秩序は家族秩序と家族規範の拡大として孝に本質を求めた。第二に、家父長制の継承を求めた儒教倫理は血縁重視の価値をもたらした。伝統社会の個人は個人として独立された存在ではなく、集団の個人として存在した。<sup>9)</sup> 第三に、男子優位の価値を強めた。男子だけが家系の継承者になる家父長制であり、男子の中でも長男のみに自動的に世襲される家父長権は、男児の出産が女子の絶対任務となる。男児重視の態度は相対的に女性の価値を無視した朝鮮独特の女子モラルを生み出した。そして、第四に、儒教倫理は縦的の人間関係として現れた。男尊女卑、三従之道などの男女の人間関係だけではない。家庭においても父子、年齢、身分などの縦的の人間関係が存在した。<sup>10)</sup>

韓国の伝統家族社会の特色は伝統家族の形態からみると、<sup>11)</sup> 家族構造は直系家族でありながら拡散型である。すなわち、子女が結婚すると長男夫婦と子女は祖父母と同居するが、次男以下は婚姻と同時に分家する。また、家族数からみると、朝鮮の伝統家族は大家族である。世宗実録『慶尚道地理誌』によると、1戸の平均人口は榮州15.7人、河陽12.2人であり、善山11.3人である。また、昌寧、金海、固城の戸当人口は10.8人であり、清道、豊川10.5人、東萊8.3人、慶州、蔚山7.9人、晋州7.3人、大邱5.8人である。<sup>12)</sup> これらをみると、伝統家族は大家族を形成しており、実際は死亡率が高かった当時を推測すると、出生率をもっと高かったと思われる。

伝統家族の機能における大綱領である儒教倫理は父子中心の家族生活を強調する。このような儒教倫理は男児を好む思想が強烈に受け入れられ、女性を男性に隷属させる「三従之道」「七去之悪」「七出三不去」などは、その代表的なモラルである。したがって、家系継承は長男に継承される家父長の世襲制度として家系継承者を出産することが女性の絶対使命である。婚姻は健康な家系継承者を出産するために優生学的な結婚慣行に従った。すなわち、「同姓同本不婚、百里（40km）内の不婚および越三性婚姻」などである。また、韓国伝統社会は身分の区別が明確な階級社会であるから、家柄を守るために同等身分の結婚を徹底した。

男児養子は実子のいない家で近い親戚から養子縁組するが、一般に兄弟の息子を受け入れた。ただし、長男に実子のいない場合、弟が一人っ子であっても、その一人っ子を兄に譲り、自身は他の家で養子を受け入れる義務があった。これは血族を守ることに長男を絶対優先した社会慣行である。このように、家系の継承は祖先に対する義務、孝行であり、自身の老後の頼り手段として伝統家族に最も重視した機能である。

伝統家族の最重要な機能は家系の継承であり、子女を家柄や家風による養育が求められる。伝統社会の価値観に合わせて、子女を養育することは精神的次元で家系を継承するものである。<sup>13)</sup>

子女の養育は家族の中でも女性の役割として任務が任せられる。それは胎児期から胎教を重視しながら、胎児の成長と発達のために栄養、情緒、行動、言語、健康などを格別に管理する。しかし、胎教の遵守には男性である胎児の父親や家族の協力が求められた。<sup>14)</sup> 授乳期においても養育と社会化の担当者は主に母親が担ってきた。授乳方式と態度は姑、舅の干渉を受けるほど子女の初期社会化は伝統家族で極めて厳格に行われた。離乳には祖母が代理母の役割を果たした。代理母として祖母の貢献は、離乳で発生する衝撃を最大限に減らしてくれた。祖母は離乳児を食卓に向かわせ、次第に成人の食べ物に慣れるよう導き、排便訓練も担っていた。

このような離乳と排便訓練が終わると、子どもは児童期の発達段階に至り、男児の社会化には父親や祖父が関わり始める。また、女兒には母親や祖母など親戚の成人女性が女兒の社会化を担うことになる。概ね5～6歳頃の男児は両親と離れ、祖父や父親と居間で生活する。それは未来の成人男性として、特に家長として必要な知識と技能と礼儀の教育を受ける。家風、家柄に対する初歩的教育は、この時期から始まり、7歳くらいになると、本格的に性別による男子の役割教育を受けるようになる。女兒は相変わらず、母屋が生活の場であり、教育の空間である。成人女性と同棲の生活場所で暮らしながら、4、5歳までは男子と類似する内容の社会化過程を辿る。男女区別が始まる7歳頃になると、成人女性に要求される家族および社会的役割に対する知識、態度、機能を女性家族から教わる。

伝統社会における個人は生得的地位を付与されて生まれる。この生得的地位が長男、次男により待遇が異なる。伝統社会で個人は血縁により、無限に繋がれる輪に過ぎない。これは子女の社会化過程に重視された社会化内容であり、義務と権利であった。とりわけ女兒は将来、他門に出家して実家の名誉を守るために、より厳しい社会化過程を辿った。<sup>15)</sup>

## 2. 韓国の伝統育児における遊びと児童期の概念

伝統社会と児童期の概念をどのように定義するかは様々な意見がありえるが、本来、遊びというものは、幼児期、児童期に存在するものと考えられる。しかし、韓国の近代化過程をみると、ラジオやテレビが本格的に普及される以前の1970年代前半までは、野外遊びが子どもの日常生活であり、中学生も頻繁に加えられ、必然的に伝統遊びがよくみられた。本章では、教育心理学者である柳岸津氏の先行研究を踏まえながら、1970年代の韓国南部地域の伝統遊びを言及したい。

乳幼児期の遊びを考察すると、柳岸津氏は、「韓国の伝統社会の育児は乳幼児のための遊びが多く発見される。それは乳幼児生活の短所を克服し、生活に楽しい変化をもたらせ、成長を促した。主に身体的機能の発達のための動作訓練である乳幼児期の遊びは、単純な言葉のリズムを生かして繰り返すから、乳幼児の言語発達とリズム感覚の発達に役立った」<sup>16)</sup> という。

乳幼児の遊びから、今日にもよく見られる代表的な伝承遊びを取り上げると、まず「トリトリ」であるが、実際は保護者が任意の節付けで歌うものである。乳幼児の生活はおっぱいを飲んで寝ることがほとんどの生活である。したがって、この時期の赤ちゃんに簡単な「首運動」の遊びを創ったものである。すなわち、「トリトリ」という言語的指示と共に、遊びを手伝う成人が自身の首を左右へ振り見せる行動である。この際、乳幼児は「トリトリ」という易しくて簡単な言葉をメロディーに合わせて、保護者の動作を模倣した。

次に、「チャッチャクン」を取り上げると、この乳幼児の遊びも乳幼児に保護者が自身の両手の平を打ち、音を出しながら「チャッチャクン」と声をかける。また、手の平を合わせて音の出る動作を繰り返して見せ、乳幼児が真似するよう誘導した。この遊びはリズム感覚を

覚えるが、乳幼児の手と目の応答の発達を促進させる初歩的課題として意義がある。<sup>17)</sup>

児童期の遊びについて柳岸津氏の考察を転載すると、次の通りである。<sup>18)</sup> 伝統社会の児童期をより正確に測れる根拠は、伝統社会で7歳以後の児童が楽しめた遊びを解明することである。すなわち、児童に成人の役割内容を教えながら、児童らしい情緒が現れる憤怒、衝動、歓喜、恐怖などを解消、昇華させる児童遊びを取り上げた。

7歳以後から13～14歳の児童が好む遊びはママごっこ、お手玉遊び、紙折り、地面奪い合い遊び、ゼギチャギ、こま回し、ぶらんこ、板跳び、相撲、かりうち、つぶて打ち、テキマチュキ、従卿図遊びなど様々な遊びが発見されている。これらの遊びを分析すると、年齢の増加に影響を受け、この時期の遊びも以前に児童が楽しんだ遊びから、成人が楽しんだ遊びへ移行する傾向をみせる。言い換えれば、児童の年齢が7歳くらいになると、ママごっこ、ゼギチャギ、こま回し、地面奪い合い遊びなどの7歳以降の児童が楽しむ遊びの延長として現れる。7歳から離れるほどテキマチュキ、相撲、かりうち、従卿図遊びなど成人のたくましい身体運動が求められる遊びである。また、書堂（寺子屋）の教育を促す授業の応用練習、あるいは科挙試験を備えた勉学動機を誘発させる意図で創られた遊びである。このような遊びの変化動向は7歳以降の児童期が児童から成人へ移される過渡期の性格をみせている。

さらに、未婚の男児らが通う初等教育機関である書堂の上級クラスは『論語』を教えた後に、「保精」という生理哲学を教える。<sup>19)</sup> この性教育はまもなく婚礼を挙げる年齢になる児童であるが、それは婚礼を目前に置いたと見られる適齢の児童のための教育内容である。したがって、このような性教育対象の児童は、おそらく15歳くらいの少年であると考えられる。これら未婚男性は成年式を行わなかったが、成人の特徴と行動を備えたとみており、彼らの遊びは成人の遊びに類似したと思われる。

『議婚』に表れる婚姻条件は、男子16～30歳、女子14～20歳であり、前掲の柳岸津氏の調査においても、16～17歳に結婚した婦人は調査対象者572人の中で48%、18～20歳に結婚した婦人は52%である。このような結婚年齢と書堂で「保精」を教えた年齢をみると、婚礼以前には成人の遊びができるくらい成人の行動が表れたと推察される。

日本にも韓国の俗語にも「二八青春」という言葉があるが、これは $2 \times 8 = 16$ として通称される年齢、すなわち16歳で始めて成人の男子になる。<sup>20)</sup> このように、成人になったと認めた年齢が『議婚』で条件とする年齢、また、慣例の年齢などは相互類似している。これらが一致した年齢以前の15、16歳は、紛れもなく未成年として認定した児童期である。

俗語に「20代子女30代財産」が伝えられている。20歳に冠名（正式名前）に付くほど、立派な子女を設けようとしたら、15、16歳頃に結婚して20歳前後に出産しなければならない。それでこそ三七、百日、一歳誕生日、二歳誕生日のような成長の危ない節目を無事に乗り越え、冠名を付けるほど成長したと見られる。冠名を得られるほど成長すると、ようやく族譜に記載し、始めて子女として認められた。このようなことを鑑みれば、やはり結婚の適齢期は15歳以後であり、その以前に冠礼などが実施されるが、冠礼の実施以前を児童期であると言える。

しかし、児童が突然、成人になることはない。児童の特徴を免れ、成人らしさを見せながら、冠礼や婚姻の年齢に近づく時期がある。成人の特徴や行動が現れ、遊びでも成人遊びが多く模倣される時期が伝統社会の人間発達に存在していた。けれども、この時期は伝統社会の通過儀式である慣例の以前であるので、児童期であると言わざるをえない。しかし、この時期はあらゆる時代あらゆる文化で認められて来た通り一種の猶予期である。すなわち、ある時はおとなしい行動を見せるが、ある時は児童のような行動を見せる時期、音声が変わり、身体的に成人

らしい特徴が現れながら、心理的には成人と児童の特徴が交互に現れる時期が13～15歳頃であったと言える。こうして「結婚する年になった奴」「嫁入りする年になった年齢」と言われる時期が児童期の後期と成年期の初期、あるいは過渡期であると考えられる。しかし、残念ながら伝統社会では、成年前期、すなわち思春期の文化がない上に、伝統社会の確固たる慣習である通過儀礼の結婚をしない限り、この時期は児童期として規定される。

このような事実をまとめるために康吉秀『教育行政資料』(1957年)を取り上げる。彼は、1895年(朝鮮開国504年)に公布された官制および規則を考察した結果をみても、小学校8～12・13歳、書堂8～15歳、そして中学校13～19歳の分布をみると、小学校と書堂の8～15歳が児童期であることは明らかである。

また、明宗元年(1546年)に頒布した京外学校節目においても、「8、9歳から15、16歳になった者を集め、まず『小学』を教え」<sup>21)</sup>と論じたが、この時期が児童期に当る小学校という点は隆熙2年(1908年)に学部(文部省)訓令第3号でより明確に示している。すなわち、「書堂所在地に普通学校がある地域は、その地方子弟として普通学校に入学する年齢に達した者は、まず普通学校に入学することを常例とするとともに、書堂から普通学校の入学を妨害したり、進学を阻止することがないように求める」<sup>22)</sup>と示し、普通学校(4年制)と書堂は同じ初等教育機関であり、児童期が学齢期であることを指している。普通学校における児童の年齢制限は12～13歳であり、書堂もこの年齢以上になると、上級学年として中等に相当する教科課程を課した。

このような学齢制度を基に時代背景を推定すると、13～15歳頃が発達途上の猶予期として伝統社会にも存在したと考えられる。恐らくこの時期は心理的に婚礼を準備し、これまで見習った成人役割をより深める時期であろう。あるいは、時代や文化的慣習に葛藤したかもしれない。

しかし、韓国の伝統社会が成人になる手続きとして守られて来た成年式の慣例を辿らない限り、その以前の13歳までを児童期として見るべきである。すなわち、児童が成人になるために通るべき儀礼を貫かなければならない。また、この時期に児童らしい表現である児童遊びを許したとすると、それはいくら成人の性役割を教えることが養育の中心課題と言っても児童期として解釈すべきである。

### 3. 韓国の伝統育児における伝統音楽の機能

どこの国でも、その国の特性、国民性、風土などにより、伝統育児が行われる。韓国においても、出産前の風俗としては結婚と受胎俗信、胎教と出産風俗などがあり、出産後の育児としては授乳と育児、行事と命名、遊びと外出、離乳と排便訓練、言語と認知、遊びと性役割などが取り上げられる。

従来、韓国の伝統育児に関する全般的考察はかなり進展をみせたが、総体的な発達論に止まらず、より踏み込んだ個別の文化領域を対象にした研究は十分な成果を上げていない。例えば、伝統育児における音楽活動を取り上げると、先行研究はかなり蓄積してきたが、その研究内容は幼児遊びや音楽活動の意義や効用はほとんど触れず、単なる幼児音楽の楽譜を羅列的、網羅的に掲載しているものが散見される。とはいえ、拙稿がその問題を一举に解決するものではないが、とりあえず、その試みとして伝統育児における伝統音楽活動を中心に幼児の発達段階に合わせて考察したい。

まず乳幼児の遊びからみると、身体的機能の発達、言語発達の誘導などを目的に保護者が乳

幼児に意図的に行動を起こすものとして、首の動き、手の動き、おんぶなどが取り上げられる。その事例として音楽関係には《子守り歌》がある。これは遊びとは言えないが、保護者が歌を通して乳幼児を眠らせる機能と聴取による潜在的な言語発達に結びつくものである。その《子守り歌》の事例を取り上げると「ザザンザザン ウホリーザザン／わが赤ちゃん 眠れる／ワンワン犬よ 吠えるな／コケッコケッ 鶏よ鳴くな／わが王様 よく眠る」<sup>23)</sup> となり、この子守り歌は、替え歌の歌詞づけでかなり長く歌われるが、とても愛情に満ちたものである。

乳幼児から幼児になると、排便訓練を受ける時期であり、排便訓練は主に祖母が担当した。これは育児が母親から祖母へ一部移される過程であるが、祖母とは言え、実際に排便訓練は少ない忍耐が求められた。それは経験から「子ども一人育てるには大便30kgは食わなければならない」「時期が来れば、自然にできるもの」「子どもの小便や大便は漢方薬だ」<sup>24)</sup> と伝えられるように、成人の覚悟や貴重な現象として受け止めることがわかる。祖母は余裕をみせ、排便訓練は年齢が高くなると、排便がいかに汚いかを痛感すれば、自然に始末ができるという態度である。

排便訓練の方法は、とりあえず排便の不潔意識を感じさせる。幼児が歩けると、成人や年長が横おんぶする遊びをする。それは《壺売り》という歌遊びであるが、歌詞は「壺を買え 僕ら壺安売り その壺いくら 五万円を払え あれ、うんこ臭い 臭い壺は買わない 壺を買え うんこ壺を買え わがうんこ壺を買え 小便壺も買え大便壺も買え うえっ避け 臭い壺を買わないか」と歌いながら、家族の前に行ったり来たりする。この横おんぶ芝居は、まだ排便の不潔さを知らない幼児にその不潔さを認識させることが目的の遊びである。<sup>25)</sup>

さらに、幼児の排便はトイレに行かず、室内便器の尿瓶が使われたが、夏季は定められた場所である庭隅や肥塚で用便を許した。また、祖母は面白いお話、童謡などで排便訓練を楽しい遊びプログラムとして創るとともに、排便訓練を通して言語発達を促進させた。「コブラン(腰の曲がった)老婆が コブラン杖を突き コブラン道を歩く コブラン便がしたくて コブラン棗の木に登り コブラン便をしたら コブラン子犬が来て食う コブラン杖で叩くと コブランケケンコブランケケン お前の便を食って千年生きるか 僕の便を食ったら万年生きる」と歌われ、祖母は歌付きのお話を幼児に聞かせながら、用便仕付けを面白い遊びとして展開した。<sup>26)</sup>

伝統社会における祖母は最も理想的な代理母の資格を整え、最も優れた代理母の役割を成し遂げた。伝統社会の家庭は大体3世代、4世代の直系家族であり、多くの兄弟が結婚して暫く一家で生活する大家族である。したがって、多くの息子により多くの嫁を貰い、そこから生まれた多くの孫がいるが、この孫は母親が家事や農業に従事する際に、祖母が子守りをした。伝統社会の風俗では、祖母は家事の一線から退き、時間的に余裕があり、代理母として祖母の役割は非常に意味あるものである。このような祖母は育児経験から、優れた育児知恵と家事から退いた時間的な余裕、そして老年期の老人としての弱者と幼児としての弱者がもつ心理的な共感および縮まれる自身の生命が孫へ永遠に受け継がれ、新しく蘇えるという血縁がもつ独特な愛情などが複合され、最も理想的な「膝の学校」が成立される。<sup>27)</sup>

祖母の膝を中心に、祖母が幼児やそれより年齢が低い子、高い孫のために創った歌は「世の中から 世の中から 市場に出掛けた父は 木材薪売りして 栗一個買って来た 水を汲む母は 水を三かめも差す 薪を三本もくべて 大釜で蒸したぞ 皮は父にあげよう くずは母にあげよう 中身はお前と私が食べよう」と子守り歌を歌いながら、離乳と排便訓練に疲れた孫をおんぶして眠らせる。このような伝来の遊び歌は、幼児が離乳期に至り、母親の元を離れ、

祖母の元に移されて歌うものである。しかし、心理的には離乳されていない状態であり、乗り越えなければならない発達課題である。また、母親に対する幼児の恨み、家事の現役から引退して孫の面倒をみながら、日々を過ごす老人世代、かつ姑としてお嫁に対する不満や敵意が隠然に表われている。<sup>28)</sup>

伝統社会の児童は性別の区別なしに語彙連想の歌として諺文（ハングル）を学ぶ。諺文は伝統社会で「真書」としての漢文に対比させ、ハングルを蔑視する表現である。すなわち、あまりにも易しくて「朝の便所の文字」と呼ばれた。トイレで用便する間にも覚えらるる文字として重宝されたことはない。ハングルの存命は男女差別を受けた女性によって延命され、女性の書簡、歌詞などに用いられ、女性の教育、教養の書籍のみに使われた文字として「めす文字」とも言われた。また、ハングル学習は漢字を覚える前の子どもに教えたが、概ね7歳以前に始めたという。なぜならば、7歳になると男児は座敷に出て祖父や父親から千字文を学び始めるか、書堂に通い始めたからである。しかし、女兒は相変わらず、引き続き自宅で学習進度に合わせて文字勉強を進めた。「カギヤ カタカ コキョ 小川に コキョウ 魚を釣り クキユ 汁を煮る ナニヤ ナト モッコ ノニョ ノト モコ ノニョ ノニヤ(分けて) モッジャ ヌニユ ヌカ モンジョ」と歌われた。この歌は伝統社会の男女児童がハングルの基本文字を覚える歌である。初級ハングル学習は語彙連想の学習であり、楽しい歌としてすぐ覚えられ、まもなく基本文字を全て暗記できるよう指導した。ハングルの基礎学習ができたなら、男児は漢字学習を始めるが、ほとんどの女兒は『女範』『内訓』『三綱行実』などのハングルで記された女性教養書を勉学する。たまに、上流家庭の女兒らが兄や弟と同時に漢文を学び、相当の知識水準に達しているが、ほとんどの女兒は母や女性家族より教育図書で指導を受ける。賤民家庭では、子女に文字教育を認めず、たまに上流家庭子女の学習場面を盗み覗き学んで文盲者を免れる子女もいる。<sup>29)</sup>

子女と子孫に親族史に対する教育をさせるために家門の《世徳歌》を作って伝えた家系もある。また、同様の《家世永言》を作って伝えたこともある。<sup>30)</sup>《世徳歌》の歌詞に関する研究によると、大多数の《世徳歌》や《家世永言》は、1910年韓国併合の直後に発端したという。すなわち、国恥による喪失危機に直面された家系歴史、親族歴史を歌曲形式で記述し、子孫に教えようとした意図で始まったとみられる。両班（貴族階層）の後裔である《世徳歌》の作詞者らが韓国併合以後の激変時代を経て、民族保全の意識を高揚させた結果、儒教精神の継承で激動する未来社会に対応しようとしたものが《光山金氏世徳歌》《豊山金氏世徳歌》《晋成李氏世徳歌》《全州柳氏世徳歌》《安東権氏世徳歌》などである。

これら《世徳歌》は僅少な内容の相異はあるが、一つの家門で歴代祖先の徳化偉業と婦徳孝烈を序列で記した長編正格歌詞である。したがって、家門暢達を目的に子女に歌を作り頌徳させる鑑戒的なものである。それは教育的な方法に徹底した祖先代々に引き継がれた美しい徳行を忠、孝、烈で繋がれる伝記として歌われた。また、偉業に対する成果の大小は問わず、「得姓始祖」から「入郷始祖」を経て、作者の先代まで克明に叙述したものである。

事例として全州柳氏の《世徳歌》を取り上げると、「天地の万物で心霊な人類であり 四端七情性分を整え 三綱五倫を法律と見なし 半万年歴史ある わが東国を文明国へ 況や安東れいあん 鄒魯之郷有名なり 名賢達士輩出する 文章道学入立なり わが柳氏一邦を治める」と伝えている。これは覚えて歌う者の面白さと学ぶ子どもの興味を持たせることに効果がある。

《世徳歌》《家世永言》は家族史および親族史を学習するものであり、児童はその中に含まれ



た用語、語彙の概念を学習し、垂直的系譜による親等の概念、社会的職責と徳行の概念と価値も理解するようになる。また、模範的功績になりえる社会的業績とそれが価値ある理由に対する認知発達もできたと思われる。実際、《世徳歌》《家世永言》は漢文で作られた詩的文章と比喩、象徴的賛美の表現もかなり用いられた。それで《世徳歌》《家世永言》の意味を理解するためには、相当な水準の漢字および漢文の読解力が先行しなければならない。したがって、《世徳歌》のような家族史、親族史の史料は伝統社会児童の認知発達に貢献する教育的資料である。<sup>31)</sup>

遊びと童謡からみると、童謡はいつも遊びと結び付けられ、遊びの進行を助けるための補助的な目的をもっている。すなわち、遊びの歌詞として児童の遊びの一部に過ぎない。しかし、このような童謡は、幼児期における幼児の言語発達が顕著となり、遊びと分化され始め、7歳以後の性役割教育期では、ほぼ完全に遊びとは分離された童謡として独立する。遊びと結び付けられた童謡の事例として《イコレチョコレ》は「イコレチョコレカッコレ トンシマングト マング ジョリキムチチャントウカル ウンユウチェ」とある。また、児童の乳歯を抜けて永久歯が出る時に歯抜けを助ける童謡として「引っ張れ引っ張れ 綱を引っ張れ わが〇〇(児童の名前) 綱は金綱 わが〇〇綱は銀綱 千石取り地主万石取り地主羨ましくない エイシャ エイシャ綱を引っ張れ」と歌われる。このような童謡は発達課題を楽しく遂行するために作られた童謡である。「昔々 カッナルカッチョゲ ムザスコジョ時 木綿物ジョセン時 木皿の少年時 トッスバリ爺の時 赤手絡処女時代 ベコジェンイお嫁時 テコバリ叩く時 せきを出す時 木履はタルカク 藁靴はポプソク 麻の草鞋はバジジック 門風紙はパロロ 大門キーキー」と歌われた。この童謡はユーモアとウィット感覚で旋律も加え、児童の語彙発達および連想力と擬声語の学習を助けるものに貢献したと見られる。この童謡は6～7歳児童が楽しめた童謡として7歳頃が近付くと、過度的な性格を帯び出し、童謡は遊びから完全に分離され、7歳以後になると、童謡は童謡としての完全な性格を整える。<sup>32)</sup>

遊びのために付随目的としての童謡ではなく、童謡そのものを目的に遊びと完全に分離される。童謡は独立されたものとして言語、リズムおよびユーモア感覚、自然的物体や生活経験を広げるよう創られたものとして歌われた。

また、童謡は日常生活で発生する緊張、葛藤、不満の解消などのための昇華方法という独自の領域として発達した。このような時期が7歳以後の児童期である。7歳を前後する児童は年齢が低いほど自然を主題とする童謡を歌った。「太陽よ太陽よ赤い太陽よ キムチ汁にご飯をかけ食べて ジャングを打ちながら出なさい(太陽) 月も月も明るい 冬の夜も明るい 丈夫な糸で ジョゴリ作り 赤い糸でボタンを付け りんご新郎長い袖 手折らぬはまなしを 私が折ったと言うけど ゆでふぐ卵を食べて 眠る姿で私は死ぬ」と歌われた。

しかし、年齢が重ねられるほど児童は自然的な事物を主題とする童謡より、生活を主題とする童謡を好んで歌った。「姉よ姉よ我が姉よ 嫁に行く時の顔は 赤桜ん坊三個を持ち 帰りによく見ると 一滴一滴涙の一滴(姉) / わが兄は男なり 水田も取り畑も取り宮殿のような家も取り 天のような両親も取り この私の身は女のため 食べ物のご飯だけよ 着て行く服のみ 教えてくれ教えてくれ 文字だけでも教えてくれ(兄)」と歌われた。

このような童謡は男児より女児が歌ったという。女児が年齢を重ねながら、彼女たちが将来に女性としての生活を営む際に直面する哀歓などを表わした童謡である。童謡歌詞が男児と関連されたように見えるが、実際に愛唱した主流は女児である。<sup>33)</sup>

伝統社会では、児童に軽い事故が発生したり、あれこれ病気がちな者が出た時は心理療法に

依存した。それは遊び療法、催眠術、そして心理劇などを変形して用いたり、その他と混合使用した。事例として腹痛治療をとりあげると、弟が生まれた児童は腹痛が多い。心理的な原因もあるが、未熟の果物を食べたり、腐った食べ物を食べて生じる場合もある。その場合、祖母や母親は仕事を休んで児童を治療する。すなわち、腹痛を治すと自信をみせた後、児童を膝に寝かせる。そして右手で痛い腹を上下で擦りながら、「君の腹は太っ腹 私の手は薬手 お前の腹は犬腹 私の手は薬手でなり」と歌われた。この遊び療法は遊びによる児童の経験や心理的葛藤を動作や言語として表現する感情的緊張を解消させるという遊び療法の本来目的を充足させる。ただし、遊びが成人によって主導され、児童はより消極的に参加するが、このような参加によって児童は受ける者としての安らぎと満足感を楽しめる。<sup>34)</sup>

## おわりに

韓国における儒教思想は民族精神に直接関連するものであり、男児優先の慣習に従う育児方式も儒教社会にふさわしい方向で行われた。本稿は、音楽教育関係の研究であるが、必ずしも音楽教育に貫徹せず、韓国の伝統育児方式を中心に分析しながら、儒教思想に絶対的な影響を受けた伝統育児の実態を実証的に考察した。先行研究から得られた新たな視点として男尊女卑の思想が伝統育児以前の問題として、伝統育児だけではなく、女性の人権問題にもいかに重大な影響を与えたかも解明した。

また、儒教思想を背景に児童の日常生活を考究したものである。伝統育児が宗教儀式や生活規範に縛られるものとして掘り起こすというより、その根底から支配している儒教思想を背景に音楽活動の前提になりうる伝統育児と伝来遊びを中心に考察した。その結果、伝統遊びは、必ずしも児童が自主的、主体的に遊びを営むことより、成人の介入が欠かせず、祖母と遊びによる育児は韓国独特の儒教社会だけにみられる育児方式であった。

そして、伝統育児における伝統音楽に焦点を合わせ、幼児のみならず、児童期まで分析した。その結果、どこの国でも見られる《子守り歌》は確かに存在したが、生活習慣訓練のための実用音楽が歌われ、排便訓練などには欠かせない音楽活動であった。特記すべきことは、韓国の儒教社会がそのまま反映された家門教育に用いられる家門歴史歌である《世徳歌》《家世永言》などである。このような歌が幼児や児童に歌われることは、韓国が儒教社会とはいえ、音楽教育の視点からみると、果たして音楽的成長にどのくらい役に立つかはいささか疑問が残るものである。

## 注

- 1) 韓国伝来童謡集の代表的文献は、金スクキョン『韓国伝来遊び歌—乳幼児・児童・教員のための理論と実際』トンムンサ、2001年。洪洋子『伝来童謡を巡って』ウリ教育、2000年などがある。
- 2) 李光奎『韓国家族の構造分析』一志社、1975年、7頁。
- 3) 柳岸津『韓国の伝統育児方式』ソウル大学校出版部、1999年、8頁。
- 4) 韓佑勳『韓国通史』乙酉文化社、1970年、8頁。
- 5) 柳岸津『韓国の伝統育児方式』9頁。
- 6) 孫仁銖『韓国人の価値観』文音社、1979年、9頁。
- 7) 李成茂『韓国史』第10巻、「朝鮮両班」ソウル大学校出版部、1977年、10頁。
- 8) 柳岸津『韓国の伝統育児方式』10頁。

- 9) 呂重哲「聚落構造と身分構造」(『韓国の社会と文化』第2輯、韓国精神文化院、1980年) 13頁。
- 10) 柳岸津『韓国の伝統育児方式』15頁。
- 11) 李光圭『韓国家族の構造分析』50～55頁。
- 12) 金斗憲『韓国家族制度研究』乙酉文化社、1946年、436頁。
- 13) 柳岸津、『韓国の伝統育児方式』18～23頁要約。
- 14) 師朱堂 李氏『胎教新記』蔡漢祖祚方、1937年、24頁。
- 15) 柳岸津、『韓国の伝統育児方式』24～25頁要約。
- 16) 同上書、218頁。
- 17) 同上書、219頁。
- 18) 同上書、54～56頁。
- 19) 李元浩『胎教』博英社、1977年、167頁。
- 20) 同上書。
- 21) 康吉秀『教育行政』豊国学園、1957年98頁。
- 22) 同上書、189頁。
- 23) 柳岸津、『韓国の伝統育児方式』223頁。
- 24) 同上書、246頁。
- 25) 同上書、246～247頁。
- 26) 同上書、248頁。
- 27) 同上書、253～254頁。
- 28) 同上書、256頁。
- 29) 同上書、294～297頁要約。
- 30) 金麟九『世徳歌系歌辞に関する研究』壇国大学校大学院修士学位論文、1979年。
- 31) 柳岸津、『韓国の伝統育児方式』313～315頁。
- 32) 同上書、325～326頁。
- 33) 同上書、326～332頁要約。
- 34) 同上書、384～385頁。